

第1回持続可能な滋賀社会ビジョン策定小委員会での主な意見と今後の対応

1 「指標と目標」について

大量消費、大量廃棄は大きな問題であり、県で取り組める点ではないか。循環システムの構築も指標と目標が必要ではないか。

「脱温暖化」と「琵琶湖流域の再生」が別々のものとして並んでいる感がある。温暖化が進むと琵琶湖生態系が壊されていくので、そのために保全をする必要があるという位置づけをしてはどうか。

滋賀県として、琵琶湖という水のシンボルが県内全領域に関係している点でも、琵琶湖の指標は必要ではないか。

循環システムは、2010年の目標はあるがその後の目標がないため、指標としては採用しない。

このビジョンでは、「脱温暖化の実現」「琵琶湖環境の再生」の2つを目標として掲げる。

「脱温暖化の実現」は温室効果ガス排出量を指標として扱い、定量的な数値目標（温室効果ガス半減）を設定する。

「琵琶湖環境の再生」については、琵琶湖流域が生物多様性に富み、健全な生態系が成立し、安心・安全な水環境が成立していることと、人と琵琶湖の関わりが再生していることを目標とする。

2 「2030年の滋賀の姿」について

2030年のフレームは出ているが、持続可能な社会ビジョンに不十分ではないか。2030年は人口が減っていく過程であり、どこまで人口減少が進むのかを見極めたくて農地計画、都市計画、森林計画などを決めないといけない。最終的にどの程度で人口が安定するのかを考えた上で、ビジョンを描く必要があるのではないか。

滋賀県の予測は、国立社会保障・人口問題研究所の推計値と整合が取れているのか。

国立社会保障・人口問題研究所でも、2030年までぐらいしか、信頼性の高い予測はできないということでもあり、当ビジョンでは2030年での人口予測を採用する。

また、県基本構想で採用した国立社会保障・人口問題研究所の推計値に修正する。

3 「目標を実現するために必要となる対策」について

「滋賀シナリオ」P14 の各種対策を実行しようとする、これまでの政策と異なる政策手法を行わなければならないが、そこまで議論するのか。

山を守る必要性が今後も高まっていくと考えられ、持続可能な社会における森林の役割は重要性である。

持続可能な社会の実現には、「環境こだわり農業の振興」が不可欠である。

何にどう取り組めば 2030 年において持続可能な社会が実現されるのか、小委員会で議論いただき、ビジョンへ反映していきたい。